

TSUNAGU

［繋ぐ］

Vol. 68
2026 AUTUMN

究める Special Issue:

丸シールが描き出す光と色の構成美

PAPER TOPICS

段ボールで街を立体化
防災に活かす「段ボールジオラマ」

深める

ビジュアルコミュニケーション事業の拡大へ
専門性を備えた2社がKPPグループに参画

丸シールが描き出す光と色の構成美

文房具の丸シールを一枚ずつ重ね、光や色に満ちた風景を描き出す現代美術家・大村雪乃さん。遠くから眺めれば一枚の絵画、近づけば小さな円の集積へと姿を変える作品は、観る人に鮮やかな驚きをもたらします。大村さんを本誌で初めて紹介したのは、Vol.17（2013年10月号）のこと。あれから約13年、都市の夜景から旅先の風景、花や鳥などの自然へとモチーフを広げ、カッティングシートを取り入れた新たな表現にも挑戦。各地での展覧会やワークショップ、メディア出演へと活動の場も広げてきました。身近なシールは、なぜ人の心を揺さぶるアートになるのでしょうか。二度目の登場となる今回は、その原点や作品に込めた思い、進化を続ける表現の現在地についてお話をうかがいました。



「Twilight-Shinjuku」（2013）

TSUNAGU

TSUNAGU 2026 Autumn

KPPグループホールディングスが発行するTSUNAGU（繋ぐ）は“紙の魅力再発見”をテーマに、紙と文化・紙と事業・紙と人を「繋ぐ」広報誌です。

究める …… P01
丸シールが描き出す光と色の構成美

PAPER TOPICS …… P07
段ボールで街を立体化 防災に活かす「段ボールジオラマ」

拓く …… P10
「ペーパーターフ®」に関連する最新ニュースをキャッチアップ

伝える …… P11
働く人を思いやる心がにじむ誠実な詩人から届いた葉書

深める …… P13
ビジュアルコミュニケーション事業の拡大へ専門性を備えた2社がKPPグループに参画

紐解く …… P15
音を整え、響きに寄り添う「音楽を支える紙」

作る …… 付録
大村雪乃さんとのコラボレーションによる「特製ブックカバー&しおり」



データの輪郭に沿って正確に切り抜きができるカッティングプロッターで制作したオリジナルの丸シール。



透過性のある装飾用のカッティングシートも大量に備蓄している。



市販品の丸シール。これ以外にも色のカテゴリーごとにファイリングされている。



下図に沿って、モニター上で一枚ずつ丸シールの配置を決定する。



ピンセットを使い、設計図に沿って丸シールを一枚ずつ丁寧に貼り込む。



人気テレビ番組『プレバト!!』のお手本として制作した作品『歌舞伎座』。



実物に近づいたり離れたりと、現物を観た時の驚きを感じてほしい

SPECIAL ISSUE

『Twilight-Osaka』(2013)

観る距離によって変化する奥行きのある風景画

漆黒の画面に浮かぶ、ビルの窓や街灯、車のヘッドライト。大村さんの代表作である都市夜景を題材にした作品は、色も大きさも異なる丸シールを一枚ずつ貼り重ねて描かれています。離れて眺めると、無数の円が光の粒となって溶け合い、写真のような奥行きのある風景が現れます。ところが、一歩、二歩と近づくにつれて、見えていたはずのビルや道路は輪郭を失い、景色の像は色とりどりの丸へとほどけていきます。風景と素材の間を視線が行き来する、その瞬間に生まれる驚きこそ、丸シールアートの大きな魅力です。

「パソコンやスマホでも気軽に作品を観られるようになりましたが、それだけで観た気になってしまう人も多いと思うんです。でも、本当の面白さは、現物を目の前にしないとわからない。近づいたり離れたり、観る角度を変えたりしながら、本当にシールでできているのか確かめてほしいですね」と大村さん。シールのわずかな厚みや重なり、表面のつやまでが作品の一部となり、観る位置や光の当たり方によって表情を変えます。大村さんの作品は、鑑賞者の身体そのものを動かし、アートを観るという行為を新鮮な体験へと変えていくのです。

「芸術家として生きていく」表現の道へ向かわせた強い決意

大村さんは幼い頃から、映画や文学などに囲まれて育ちました。国語の教師だった父親は、教養を重んじていました。古文や漢文だけでなく、映画や漫画、落語にも精通していて、自宅には映像ソフトや書籍が大量に並ぶ専用の書斎があったそうです。「幼い頃から父と一緒に古典作品を観て育ちました。同世代の友だちがアニメを見ている時に、私は『オズの魔法使い』や『雨に唄えば』、黒澤 明監督の作品などをずっと観てきました。今となってはあまり内容を覚えていませんが、昔のものをちゃんと掘り下げて学ぶことの大切さは、家庭環境から学んだ気がします」。国内外の映像作品、さらには美術館や博物館で目にした多様な作品が、知らず知らずのうちに感性の土台となったのです。

そんな大村さんが子どもの頃に情熱を傾けていたのは、美術ではなくクラシックバレエでした。週に5日、有名なバレエ教室に通い過酷なレッスンに打ち込んでいましたが、十代半ばでプロとして進むことの難しさを悟ります。「どれだけ努力しても何者にもなれない、報われない世界があるんだと知りました。だからこそ、次に美術をやると決めた時は、今度こそ絶対にものにしなければ意味がない。それくらいの覚悟が芽生えたんです」。大村さんは並々ならぬ決意を胸に、多摩美術大学の絵画学科油画専攻へと進学します。

美術大学に入学後、本格的に油絵を学び始めた大村さんですが、次第にある違和感を抱くようになります。「油絵の基礎を身につける一方で、筆跡を残しながら対象の質感や輪郭を丹念に追う描き方が、自分には向いていないと気づいたんです。時間をかければ描けることはわかったし、修練もしてきたけれど、そこに対する熱量が湧かない。それよりも、色の面や配置、表現のアイデアで形を追いかける方が好きなことがわかったんです」。

既存の描き方に自分を合わせるのではなく、自分の感覚に合う表現を探す。その模索の先に、丸シールが待っていました。

夜景の記憶と丸シールが一つの表現として結びつく

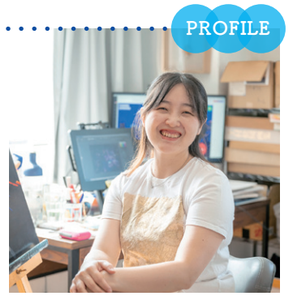
大村さんと丸シールとの出会いは、美術大学進学のために予備校に通っていた頃に遡ります。当時、抽象画で円を描き続けていた大村さんは、「円を一つずつ描いて塗るのは面倒。だったら丸シールを貼ればいい」と、文房具の丸シールを画材として手元に置くようになります。でも、ただ貼るだけでは面白くない。丸シールを使って何かできないかと模索していた彼女の脳裏に、幼少期の記憶が蘇りました。「かつて住んでいた家のリビングに、蓄光で光る夜景の写真パズルが飾ってあったんです。夜中に水を飲みに行くと、いつも暗闇で光るそのパズルを観て『きれいだな』と眺めていた記憶があって。もし自分が芸術家になるなら、あの夜景の作品を超えなければいけない。自分が受けた感動を超えることができなければ、作家になる意味がないと思ったんです」。大村さんにとって、夜景を描くことは、作家として歩み出すために自らに課した最初の目標でもあったのです。

「夜景の作品を超えるにはどうしたらいいか」。その答えとして、大学2年の頃、いつも手元にあった丸シールを作品に使用する発想に辿り着きました。暗い背景の上に、色とりどりの丸シールを緻密に貼り重ねていくことで、都会のネオンや街の灯りが驚くほどの立体感と輝きを持って浮かび上がる。身近にある市販の文房具が、見事な夜景の光の粒へと変換される瞬間でした。「安価なシールが、人々が憧れる都市の光に変わる。その金銭的な価値のギャップから、人が美しいと感じるものは何かを問うことができるんじゃないかと考えました。そのコンセプトは、今でも一貫して変わっていません」。2012年、丸シールで夜景を表現した作品が「Tokyo Midtown Award」でオーディエンス賞を受賞。翌年の大学卒業後、大村さんは本格的な作家活動へ踏み出すことになります。

デジタルで緻密に設計したうえで手作業で一枚ずつシールを貼り込む

一見、ひらめきと感性のままにシールを貼っているように見える大村さんの作品ですが、その背後には綿密な設計があります。制作は、モチーフとなる風景を撮影することから始まります。一枚の写真を使う場合もあれば、複数の写真を切り貼りするように組み合わせ、理想の構図をつくる場合もあるそうです。完成した下図はパソコン上でレイヤーを分け、すべてのシールの配置や色をシミュレーションした緻密な設計図を作成。原寸大の下図の上に、ピンセットで丸シールを一枚ずつ手作業で貼り進めます。「写真の通りの色がシールにあるわけではないので、画面全体のバランスを見ながら色を選びます。絵としてバランスが悪ければ、容赦なくビルごと消すことも、逆に光を増やすこともあります。また、写真の通りに色を置いても上手くいきません。色味のバランスを見てあえて色味を落としてみたりと、色の選別には常にこだわっています」と大村さん。写実的

PROFILE

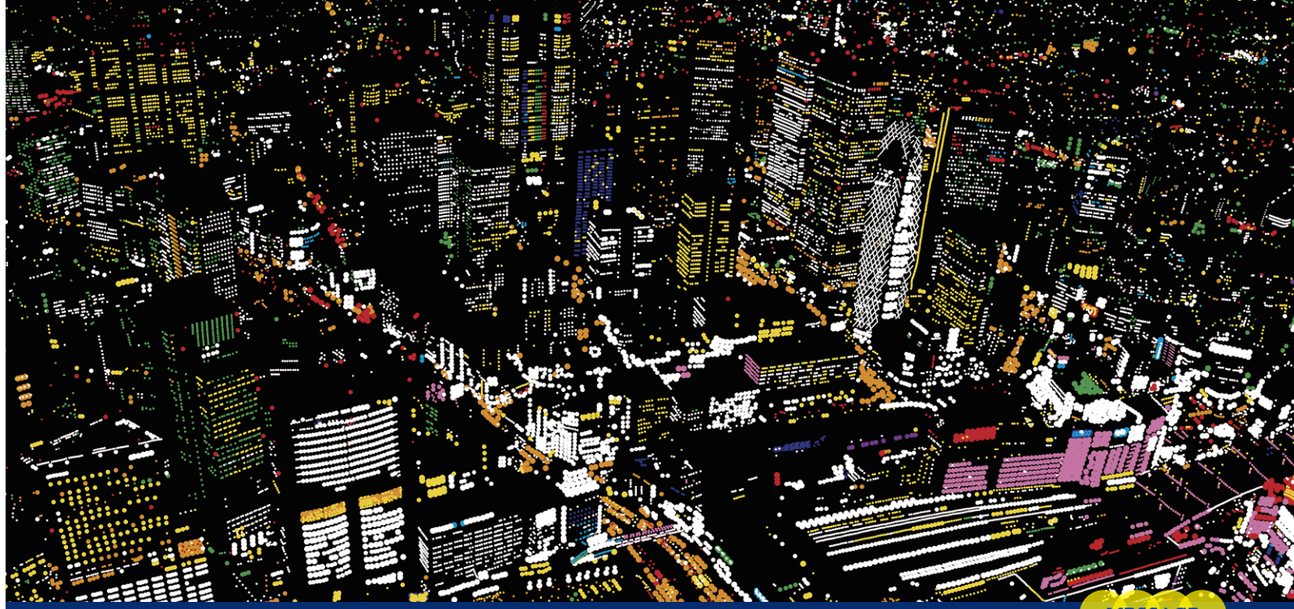


現代美術家

大村雪乃 Ohmura Yukino

1988年生まれ、東京都在住。2013年、多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業。大学在学中に文房具の丸シールで夜景を描く作品を発表し、2012年「Tokyo Midtown Award」にてオーディエンス賞を受賞。以降、国内外で個展やグループ展を開催するほか、観客参加型ワークショップを開催。MBS・TBS系列で放映中のバラエティ番組『プレバト!!』では丸シールアート作品を査定する先生として出演中。2025年より朝日新聞「文芸時評」の挿画を担当。

公式HP ：https://yukino-art.com/
公式SNS：Instagram @yukino_ohmura
@yukinoohmura



MESSAGE

ありふれた素材だけでも絵が描けるということを伝えたい





●[光の旅]シリーズ　大村さんが実際に訪れ、目で見て感じた全国各地の名所や観光地を描くシリーズ。丸シールにアクリル絵具やカッティングシートを組み合わせ、土地ごとに異なる色や光を、旅の記憶を呼び覚ますような臨場感とともに表現する。
左:『釧路湿原夕景』(2024)／右:『姫路城』(2024)





●ワークショップ作品　開催地の風景や名物を題材に、参加者が大きな下絵へ丸シールを貼り、力を合わせて完成させる作品。年齢や絵の経験を問わず誰もが制作に加わることができ、一枚のシールが壮大な風景の一部へと変わる驚きと喜びを分かち合う。
左:『みんなでつくろうCOCONOdeシールアート～丸シールで描くススキノ～』(2024)
右:『レイリア春日原開業記念　丸シールアートワークショップ』(2026)



●[City light]シリーズ　大村さんの代名詞ともいえる、大都市の夜景を描いたシリーズ。無数の丸シールをビルの窓明かりやネオンに見立て、大小の円を緻密に重ねることで、都市が放つエネルギーと、無数の光が繰りなす壮観を浮かび上がらせる。
上:『Blue Tokyo』(2023)／ページ上部:『Shinjuku』(2019)





●[十三夜月]シリーズ　月や草花、動物など、秋の情景をカッティングシートで表現したシリーズ。透明・半透明のシートを巧みに重ね、アクリル板やガラスの透過性を生かしながら、現代の屏風絵を思わせる奥行きと彩り豊かな風景を描き出す。左:『キク2』(2024)／右:『ハナウド』(2024)





●[花鳥諷詠]シリーズ　花や鳥など四季の自然を、有機的な形に切り出したカッティングシートで描くシリーズ。デジタルで設計したシールを一枚ずつ貼り合わせ、日本画に学んだ構図や余白を生かしながら、伝統的な自然美を現代の風景として再構築する。左:『コスモス』(2023)
右:『芙蓉』(2023)

に見える風景も、大胆な省略や色の置き換えを重ねて構成することで、丸シールによる「絵画」として成立させることができる。そうした緻密な計算と独自の色彩感覚、膨大な時間を要する手作業があるからこそ、遠くから見たときの圧倒的なリアリティが生まれるのです。

現在大村さんが使用する丸シールは、市販品のほか自らカッティングプロッターを使って自在に切り出した自作のものを合わせて約240種類。大きさの異なるシールを使い分け、時には半透明のシールを重ねて、既製品だけでは表せない微妙な色合いをつくり出します。「作品によっては、一つの色を表すために四層ほど重ねることも。歌舞伎座を描いた作品では、6千枚以上の丸シールを使用しています」と大村さん。数千回の手作業を重ねながらも苦労の跡を前面に出さず、色と円の配置によって、作品の軽やかな風景が立ち上がるのです。

「上手に描く」だけではない丸シールだから示せるアートの自由度

大村さんが丸シールにこだわり続ける理由は、その意外性や美しさだけではありません。絵画は高度な技術で描くもの、特別な画材を使うもの。そんな固定観念から人々を解き放ちたいという思いがあります。「アートの世界には、技術的な上手さや、伝統的な高い画材を使っている作品こそがすごい、という風潮がどこかにあるんじゃないかと。もちろんそれも素晴らしいのですが、本質はもっと単純でいいはずなんです。技術が卓越していなくても、ありふれた文房具のシールだけで絵が描ける。そのことを伝えた方が、うまく描けないコンプレックスを抱えている多くの人たちにとって、救いになると思うんです」。

大村さんが重視するのは、色の面を配置することで何を描き、何を描かずに残すのかという画面の構成です。「絵の本質は、色面と配置、デザインにあると思っています。それをシール一枚でポンと表せたら最高にクールですよね」。絵の具なら塗り込むことで整えられることもありますが、形も色も決まった丸シールではごまかすことができません。単純な円だからこそ、画面の重心やリズム、余白に対する作り手の感覚が鮮明に表れるのです。「たかが丸シールと軽く見られることもありますが、そこが面白い。ありふれた素材だけでも絵が描けると伝えることは、たくさんの人にとって救いになると思っています」。特別な画材を使わなくても、自分の発想が表現になる。大村さんの作品は、観る人の中にあるアートとの距離をそっと縮める役割も担っているのです。

誰もが知る素材だからこそつくる体験が次の発想を育てる

作品の発表と並んで、大村さんが力を注いできたのが、丸シールを使ったワークショップです。各地の美術館で展覧会を開く際には、必ずと言っていいほどワークショップが企画され、子どもからシニアまで、誰もが丸シールを手にして自分の作品づくりに取り組むそうです。また、ワークショップでは、開催地の風景や名産物などを題材にした作品を共同で制作することも。富山県砺波市ではチューリップ畑、静岡県掛川市では地域の祭りをモチーフに、地域の方々と大型作品をつくり上げたそうです。「いろんな素材でアートがつくれるという体験をしてほしいんです。小さい頃にそういった原体験があれば、大人になってからも『これも何かのアイデアになるんじゃないか』と発想の起点になる。私が丸シールで証明したように、行動を起こせばそれが実現するということを、ワークショップを通して体感してもらえたら嬉しいですね」。

また、放映中の人気テレビ番組『プレバト!!』では、丸シールアートを査定する先生として出演。「限られた色と形をどう配置し、どこに余白を残すかを読み解きながら、出演者の作品を講評しています。番組を通して丸シールアートを知ってくれる層の広がりを実感しています」と大村さん。最近は、外国人からも「このシールは学校にあった」と声をかけられることがあるそうです。身近な文房具から生まれたアート作品の驚きは、国境も世代も越えて共有されています。

丸シールのさらにその先へシールで描く絵画は進化を続ける

前回『TSUNAGU』にご登場いただいてから約13年。大村さんの丸シールアートは、都市の夜景から自然、建築、各地の名所へとモチーフを広げてきました。近年は、背景や輪郭にカッティングシートを取り入れることで、丸シールの光や色をいっそう引き立てる作品も増えています。「半透明のシートを重ねれば既製品にはない色のグラデーションが生まれ、偏光性のあるシートを使えば観る角度によって水面の揺らぎや光の移ろいを表現できる。丸シールを起点に、シールという素材そのものの可能性を掘り下げていきたいですね」。

大村さんが見据えるのは、背景を含め、すべてをシールで構成した絵画です。「今は背景にアクリル絵の具を使うこともありますが、できればシールのみで作品をつくりたい。印刷技術も進化しているので、グラデーションのシールなど新しい素材を取り入れながら、まだ誰も見たことのないアートをつくってみたいと思っています」。丸シールで開いた扉から、さらに自由なシール表現へ。その根底にあるのは、既存の画材やジャンルにとらわれず、色と形、配置によって絵画をつくるという一貫した姿勢です。

小さな丸シールを貼る。それは誰にでもできるごく簡単な行為です。文房具という親しみやすい入り口から、奥深い構成美の世界へ。大村さんの生み出す作品は、私たちに見慣れた日常の中にも、世界を驚かせる魔法が隠されていることを教えてくれています。

INFORMATION

都市の夜景や風景を描いた大村さんの代表作をはじめ、全国各地の風景や花鳥風月などをモチーフとした作品を展示。そのほか、札幌の風景をテーマに来場者とともに制作する大型ワークショップ作品も展示予定です。

大村雪乃展「BEAUTIFUL LIGHTS ― シールアートの世界」

●会　期:　2027年1月2日(土)～2月11日(木・祝)
●会　場:　サッポロファクトリーギャラリー
(札幌市中央区北2条東4丁目 サッポロファクトリー3条館3階)
●入場料:　一般1,500円(前売1,300円)、中高生900円(前売700円)、
3歳～小学生500円(前売300円)　※2歳以下無料

著書

大村さんオリジナル作品の下絵と、点描に使用する丸シール、完成見本を収録した2冊の著書を刊行。実際の作品づくりを通して、丸シールアートの世界を体験することができます。



左:『Let's Try! みんなの丸シールアートブック』(2023年)
右:『Let's Try! みんなの丸シールアートブック vol.2』(2026年)　※発売:クレヴィス

付録　今回の付録は、大村雪乃さんの丸シール作品が楽しめる「特製ブックカバー＆しおり」です!







地域の地形や高低差を立体的に把握でき防災を身近にする「段ボールジオラマ」

今年7月28日に発生した令和8年熊本地震をはじめ、日本各地では大規模な地震が繰り返し発生しています。さらに近年は、線状降水帯や記録的な大雨による河川の氾濫、内水氾濫、土砂災害なども相次ぎ、これまで大きな被害を経験してこなかった地域でも、自然災害は決して他人事ではなくなっています。災害から命を守るためには、防災用品を備えるだけでなく、自分が暮らす街の地形や災害リスクを知り、いざというときにどこへ、どのように避難するのかを日頃から考えておくことが大切です。

そんな防災意識を高めるのに役立つツールとして注目されているのが「段ボールジオラマ」。これはデジタル地図データを基に制作された段ボール製の組み立て式キットです。等高線に沿って切り抜かれた段ボールのパーツを低い場所から高い場所へとパズル感覚で積み重ね、地域の地形を立体的に再現。平面の地図だけでは捉えにくい土地の起伏や高低差が目に見える形になり、なぜその場所に浸水や土砂災害のリスクがあるのかを、直感的に理解することができます。

完成したジオラマには、自宅や学校、避難所、よく利用する場所などを記し、危険だと思う場所や避難経路を考えていきます。自分たちの手で街を組み立て、さまざまな角度から眺め、意見を交わすという一連の体験が、防災を「与えられた知識」から「自分自身に関わる問題」へと変えていきます。軽いうえに加工しやすく、誰もが気兼ねなく触れられる段ボールだからこそ、子どもから高齢者まで世代を越えて同じジオラマを囲み、地域について語り合う機会が生まれます。

段ボールジオラマの活用シーンは、小学校から高校までの防災に関する授業をはじめ、PTAや自治会が行うワークショップ、自治体の防災訓練など多岐にわたります。子どもたちが楽しみながら地域への関心を深める教材である一方、行政や研究機関の専門家が課題を共有し、復興計画や街づくりについて議論するためのツールにもなるなど、使い方はさまざまです。

この段ボールジオラマを活用した実践的かつ主体的な防災教育の普及を推進する一般社団法人防災ジオラマ推進ネットワークで代表理事を務められている上島 洋さんへのインタビューを交え、小学生から専門家まで、さまざまな人が活用できる段ボールジオラマの魅力をご紹介します。

基本的な使い方

1 組み立てる



等高線に沿って切り抜かれた段ボールを、低い場所から順に重ね、街の起伏や高低差を立体的に再現する。

2 地形を読み取る



完成したジオラマを見渡し、土地の高低差や斜面、川との位置関係から、街の地形の特徴を読み取る。

3 マッピングをする



自宅や学校、避難所などに印をつけ、ハザードマップと照らし合わせながら、安全な場所や地域の危険を探す。

4 話し合う



地形やマッピングから気づいたことを共有し、災害時の避難経路や行動、地域に必要な備えについて話し合う。

INTERVIEW

一般社団法人
防災ジオラマ推進ネットワーク
代表理事

かみじま ひろし
上島 洋 さん



「ジオラマを囲むと、みんなが自然と話し始める。見るだけではなく、触れて考えることに価値があるんです」

――段ボールジオラマを使った活動を始めたきっかけを教えてください。

私は2011年の東日本大震災を機に、防災の大切さを強く意識するようになりました。ただ、「防災」を正面から掲げるだけでは、時間とともに関心が薄れ、活動も長続きしにくいと感じていました。そこで考えたのが、身近なものを入り口に、自然と防災へつながる道筋をつくることです。震災後に訪れた宮城県石巻市で、優れた段ボール加工技術を持つ今野梱包株式会社の今野社長と出会い、段ボールで地域の地形を再現する着想が生まれました。その後、マーケティングやデザイン、広報、気象など、それぞれ別の専門分野を持つ仲間が賛同して集まり、2015年に一般社団法人防災ジオラマ推進ネットワークを設立しました。

――防災を考えるうえで、なぜ地形を知ることが重要なのでしょうか?

自治体のハザードマップには大切な情報が詰まっていますが、平面の地図から土地の起伏や高低差を読み取るには、ある程度の知識が必要です。段ボールジオラマは、等高線に沿って切り抜いた段ボールを重ね、街の姿を立体的に表しているので、水が集まりやすい低地、津波が到達しやすい場所、土砂災害の危険がある斜面などを、地形との関係から直感的に捉えることができます。例えば、川から離れていても、周囲より低い土地では豪雨時に水が集まり、内水氾濫が起こることがあります。色分けされた危険区域を見るだけでなく、「なぜここが危ないのか」まで理解しやすくなります。

――地形模型の素材に段ボールを選んだ理由は何ですか?

軽くて加工しやすく、誰にとっても身近な素材だからです。木材などで大きな模型をつくると重くなり、扱いも難しくなります。その点、段ボールなら子どもでもパーツを持ち、パズルのような感覚で組み立てることができます。また、付箋を貼る、目的に合わせて情報を加えるといった加工の自由度も高い。加えて、使用するパーツはマジックテープで留める仕様なので、分解して型枠に戻し、繰り返し使うことができます。学校では複数のクラスや学年で利用されることもあり、傷んだ部分だけを交換しながら長く活用していただけるように工夫しました。

――「自分でつくる」体験を大切にしているのはなぜですか?

完成した地図を見せられるだけでは、情報がなかなか自分の中に入ってきません。自分たちの手で組み立てると、その瞬間から地形への関心が生まれます。学校の授業では、組み立てたジオラマに自宅や学校、避難所を示し、危険だと思う場所に付箋を貼って、その理由を発表してもらいます。正解を教えるのではなく、地形を見ながら自分で考えることが重要だと考えています。子どもたちへのアンケートでは、組み立てだけでなく、「考えて付箋を貼ることが楽しかった」という声が多く寄せられました。考えることや学ぶことは、本来、自由で楽しいものなのだと私たちも気づかされました。

――どのような場面で活用されていますか?

小学校から高校までの防災関連授業をはじめ、PTAや自治会のイベント、自治体の防災訓練、防災リーダーの育成、研究機関での検討など、幅広い場面・用途でご活用いただいています。そのほか、ジオラマを見た後に実際の街を歩き、坂道や崖、階段などを確かめる活動も効果的です。「避難経路に急な坂がある」「この階段は車いすでは通れない」といった課題が具体的に見えてきますし、街で見つけた危険な場所や、避難時に役立つものをジオラマに書き込むと、地域をより深く理解できます。特に災害を経験した地域では、学校や地域で継続的に使いたいという相談をいただいています。

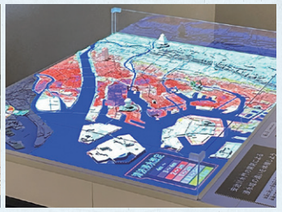
――防災以外の学びにも活用できますか?

地域の歴史や環境を学ぶ教材としてもご活用いただけます。具体的な例を挙げると、横浜では、海や砂浜だった場所が埋め立てられ、現在の街の姿へと変化してきた過程を、パーツを外したり戻したりしながら学べるジオラマを制作しました。岩手県の陸前高田では、震災前後のかさ上げや造成による地形の変化を再現した例もあります。また、プロジェクションマッピングやAR(拡張現実)を組み合わせ、浸水想定、地震火災のリスク、観光・歴史情報などをジオラマ上にビジュアルで映し出す取り組みも進めています。

――今後、段ボールジオラマの活動をどのように広げていきたいですか?

デジタルで地図を自在に見られる時代だからこそ、目の前に現物があることには大きな意味があります。段ボールジオラマを置くと、子どもから高齢者、行政職員や専門家までが自然と集まり、指を差しながら話し始めます。普通の模型は触ることができないことも多いのですが、私たちのジオラマは「触ってなんぼ」です。一つの立体地図を囲み、それぞれの知識や経験を持ち寄ることで、新しい気づきと対話が生まれるのです。今後は学校やワークショップに加え、役所や図書館などの公共施設にも常設し、平時の地域学習から災害時の情報発信まで担うメディアに育てるのが目標です。自分の街を知り、防災を自分ごととして考える機会を全国へ広げていきたいと思っています。





大阪市此花区にある安治川新水門情報発信館に設置されている展示物。スイッチを押すと段ボールジオラマの上に、浸水エリアを解説する動画がプロジェクションマッピングで投影される。

持続可能な社会の実現に向けた、KPPグループのあくなき挑戦をご紹介

KPP Sustainable Times

限りある資源やエネルギーの循環・再生は、現代社会が向き合うべき重要な課題です。KPPグループは「循環型社会の実現に貢献する」をミッションに掲げ、事業を通じた持続可能な社会づくりと企業価値の向上に邁進しています。今号では、実証実験を経てさらに進化した屋外向け紙製人工芝「ペーパーターフ®」の改良版導入事例と、「日本子育て支援大賞2026」受賞のニュースをご紹介します。

01 神奈川県葉山町の南郷上ノ山公園内広場にて改良版「ペーパーターフ®」を敷設しました

当社グループ会社の国際紙パルプ商事は7月11日、神奈川県葉山町の南郷上ノ山公園内にあるインクルーシブ広場において、トライアル敷設していた紙製人工芝を、改良版「ペーパーターフ®」へと敷き替えました。広場内の「ふかふかエリア」には54平方メートルの「ペーパーターフ®」が敷設され、地域の子どもたちが元気いっぱいに遊ぶ空間として活用されています。

国際紙パルプ商事と、ペーパーターフ®を企画・製造・販売する王子ファイバー株式会社、葉山町の3者は、2025年1月から同広場にて紙製人工芝の実証実験を重ねてきました。実際の屋外環境における耐久性や使用による変化を検証し、得られたデータを製品改良へと還元することで、耐久性と耐候性をさらに向上させることに成功しました。

ペーパーターフ®のパイル部分には、バショウ科の植物「アバカ」を原料とする紙を撚り合わせた「紙糸」が使用されています。この紙糸は、繊維製品の国際的な安全性認証「エコテックス®スタンダード100」において、3歳までの乳幼児向け製品に求められる厳しい基準をクリアしています。また、一般的なプラスチック製人工芝と比較して炎天下でも表面温度が上がりにくく、アバカ繊維ならではの強靭さを生かした耐久性・耐水性も兼ね備えています。

実際の屋外環境で検証し、得られたデータを次の製品へと生かす。KPPグループは今後も紙と紙糸の可能性を追求し、公共空間をはじめ、教育施設や保育施設などへの展開を積極的に進めていきます。



02 「ペーパーターフ®」が日本子育て支援大賞2026を受賞

王子ファイバーが開発・販売する「ペーパーターフ®」が、一般社団法人日本子育て支援協会主催の「日本子育て支援大賞2026」を受賞しました。本賞は、子育て世帯に役立つ商品・サービスを対象とし、「安心・安全」「負担軽減」「子どもの成長」などの観点からその価値を評価するものです。今回の受賞では、子どもが安心して遊べる場の創出に貢献している点と、紙素材を生かした環境配慮性が高く評価されました。

都市部を中心に、外遊びをする機会の減少や気候変動の影響により、子どもたちが十分に体を動かせる機会の確保が課題となる中、「ペーパーターフ®」の活躍の場は着実に広がっています。現在では、保育施設や民間託児所、都内公共施設のキッズスペース、商業施設内の子ども向けアミューズメントエリアなど、子どもたちが集まる多様な場所で採用されています。

今回の受賞を一つの契機として、KPPグループは今後も環境配慮型素材である紙と紙糸の可能性を追求し、新たな価値創造と循環型社会の実現への貢献を目指してまいります。そして、子どもたちが安全に遊べる環境づくりに向け、保育施設・教育施設・公共空間などへのさらなる展開を推し進めていきます。

日本子育て支援大賞 JAPAN CHILD CARE ADVOCATE GRAND PRIZE 2026

（一社）日本子育て支援協会

紙を重ねて街を知る「段ボールジオラマ」の魅力

立体だからわかりやすい

平面の地図では読み取りにくい土地の起伏や高低差も、立体にすることでひと目で把握できます。水が集まりやすい低地や、津波・土砂災害の危険がある場所など、その地域が抱える災害リスクを、地形との関係から直感的に理解できるのが大きな利点です。



手を動かすことで自分ごとへ

等高線に沿って切り抜かれた段ボールを、自分たちの手で一枚ずつ積み重ねて街を再現します。完成品を見るだけでなく、つくる過程で地形に触れることで地域への関心が深まり、防災を与えられた知識ではなく、自分自身に関わる問題として考えることができます。



加工の自由度が高い

切る、重ねる、貼る、色を塗る、目印をつけるなど、段ボールは自由に加工できる素材です。縮尺や対象範囲、地形に応じて厚さを変えたり、学校や避難所などの情報を書き加えたりと、それぞれの地域や学習の目的に合わせて幅広く柔軟にアレンジできます。



持ち運び・保管にも便利

段ボールでできているため、大きなジオラマでも比較的軽く、学校や公共施設、イベント会場などへ手軽に運ぶことができます。分解したパーツは元の型枠に戻してコンパクトに収納でき、保管しやすいことも特長。学年や参加者を変えながら、繰り返し活用できます。



子どもから高齢者までが立場を超えて、幅広い用途で活用できる

1 防災関連授業



ジオラマを組み立て、自宅や学校、避難所をマッピング。水害や土砂災害などの危険を直感的に理解し、避難経路や災害時の行動を自分ごととして考える主体的な学びにつなげ、防災への意識を高めます。

2 地域イベント



子どもから高齢者、行政職員、防災の専門家までがジオラマを囲み、危険な場所や避難方法について意見を交換。世代や立場を越えて経験を共有し、地域に必要な備えを考えるきっかけをつくります。

3 環境・歴史学習



地域の自然環境や歴史を学ぶ教材として活用することも。地形と動植物の分布、神社仏閣や地名の由来、埋め立てや宅地開発による街の変化を通して、地域の成り立ちや魅力を発見することができます。

お問合せや活用事例の紹介はウェブサイトにて

一般社団法人 防災ジオラマ推進ネットワーク

住所：神奈川県横浜市中区海岸通4-22 関内カサハラビル406

ＨＰ：https://www.bosai-diorama.or.jp/

地域とともに備える企業のCSR活動にも

企業のCSR活動として、本社や事業所近隣の学校・地域団体へ「段ボールジオラマ防災授業」を届けることができます。地域の地形や災害リスクを楽しみながら学ぶ機会を提供し、地域防災力の向上に貢献。自社の拠点や災害時の支援活動をジオラマ上に示し、本業を通じた地域貢献を社内外へ発信することも可能です。



「手紙」は語る

植村鞆音

人間は表現する動物だというが、
手紙は人間の表現のなかでもっとも深く高貴なものだと思う。
手紙は手書きがいい。眼光紙背に徹すれば、書き手の人となりが見えてくる。

第四十六回　壺井繁治

文筆家は表と裏の世界を描くことがおおいので二癖も三癖もある複雑な性格の人が多いと思われがちだが、わたしのおつき合いした文筆家は、城山三郎さんにしても丸谷才一さんにしても金子光晴さんにしても、素顔はきわめて正直で素朴な常識人だったように思う。とりわけ詩人の壺井繁治さんは素朴で偽りを感じさせない純な方だった。

いつも同じ番組の話になってしまうが、壺井さんに出会ったのは、功成り名を遂げた著名人の半生を振り返る「人に歴史あり」という番組の制作を担当したお陰である。わたしは、佐多稲子さんと金子光晴さんを主役にとりあげた回で壺井さんにご出演いただいた。佐多さんの回の放送が昭和四十四年二月二十六日、金子光晴さんの回が同年九月十七日。もう六十年近いまえのことになる。

佐多稲子は明治三十七年、長崎生まれの女流作家。幼い頃から苦労を重ねて職を転々、結婚、離婚を繰り返し、戦前、プロレタリア作家として出発した。佐多さんをメイン・ゲストに迎えた「人に歴史あり」では、壺井さんから、思想統制の厳しかった時代、ナップ（全日本無産者芸術連盟）の事務所で最初に出会ったときのこと、その場には壺井の妻・栄や宮本顕治の妻・百合子も同席していたことなどを証言してもらった。

壺井繁治は明治三十年、四国・小豆島で生まれた。早稲田大学中退後いくつかの職場を転々とし、大正十四年同郷の栄と結婚する。その後アナキズムを経て共産党に入党、何度か投獄の憂き目にも遭っている。

番組で二回目の縁ができたのは、佐多稲子の回のほぼ半年後の金子光晴さんの回である。金子光晴は明治二十八年愛知県生まれ。晩年「エロじじい」呼ばわりされたりしたが、わたしのもっとも敬愛する詩人のひとりである。大正十三年小説家の森三千代と結婚。二人は、翌々大正十五年から一人息子・乾を日本に置き去りにして足掛け七年間に及ぶヨーロッパ漂泊の旅を終え、昭和七年帰国する。番組の中では、当時の金子光晴のことを、壺井、詩人の岡本　潤、中央公論の編集者だった畑中繁雄とともに振り返ってもらった。

壺井の証言によれば、「帰国した金子光晴の詩作に目を見張った。『泡』という詩に共感、自分が編集していた『太鼓』という雑誌に金子の『蚊』という詩を掲載、官憲ににらまれた」という。金子光晴の詩は語彙豊かな象徴詩だったが、反戦の寓意を官憲は見逃さなかったらしい。

栄夫人は佐多稲子に「坪田譲治の『風の中の子供』を読んでみるといい。あなたはプロレタリア文学より児童文学のほうが向いていると思う」と勧められ、「大根の葉」などを執筆。昭和二十七年に発表した「二十四の瞳」は映画化されたことも手伝って大ヒットした。

わたしが取材のため中野区白鷺の壺井宅を初めて訪ねたのは佐多さんの番組収録の直前、昭和四十四年の二月だった。二年前に栄夫人は亡くなっていた。二度目に壺井宅を訪ねたのは金子光晴の番組収録の前、同年九月だったと思う。二回とも応接間にご自分でお茶を運んでくださったような記憶がある。壺井さんはおつむが禿げあがり筋肉質で眼光鋭かったが、誠実でやさしかった。愚鈍なわたしにもそのことはよく伝わった。

わたしは、安いギャランティの免罪のために、関係した番組の出演者にスタジオでのスナップ写真を送ることを慣わしとしていたが、壺井さんは送付直後に丁寧な受取りの葉書を送ってくださった。一通目は、佐多稲子の回の放送後、三月五日の消印がある。

「拝復。先日は写真わざわざ御送り下さってありがとうございます。『人に歴史あり』見られなかったのは残念ですが、あの番組はずいぶん多くのひとが見ているようで、大変面白かったと、いわれました。機会をつくって見せていただこうと思っているのですが、このところちょっと忙しくてなかなかお邪魔にゆけません。お送りいただい（た）写真はなかなかうまく写っていますね。早速アルバムにおさめました。後日の思い出となると思います。伊東で一週間ほど療養してすっかり元気になりましたが、東京へかえる早々、いろいろと雑用に追われ、また疲れてしまいました。久振りでスタディオの現物を拝見しましたが、あなたたちプロデューサーをはじめ、みんな大変な労働ですね。ほんとに御苦労でした。では又」。

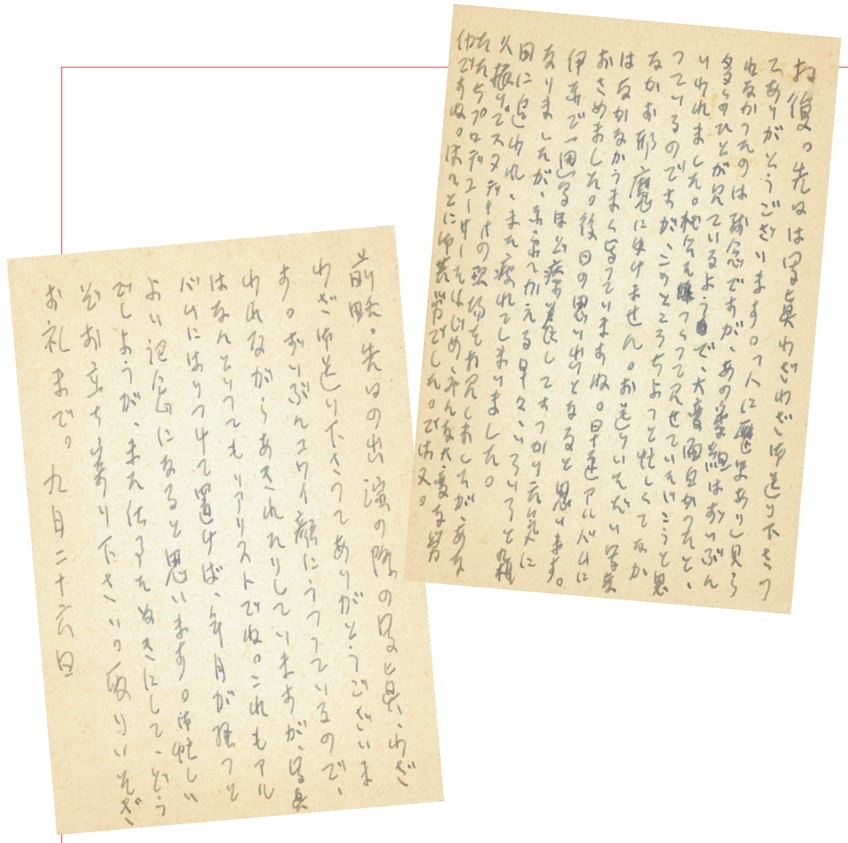
二通目は金子光晴の番組の放送後、九月二十六日の消印がある。

「前略。先日の出演の際の写真、わざわざ御送り下さってありがとうございます。ずいぶんコワイ顔にうつっているので、われながらあきれたりしていますが、写真はなんといってもリアリストでね。これもアルバムにはりつけて置けば、年月が経つとよい記念になると思います。御忙しいでしょうが、また仕事をぬきにして、どうぞお立ち寄り下さい。取りいそぎお礼まで。」

二通の手紙を読み返してみると、壺井繁治という人物の人柄が偲ばれる。生涯、一貫して労働者の立場に立ち続けた壺井さんは、二通目の葉書の終わりにスタディオで働くスタッフの労をねぎらい、二通目の葉書では、わずか数回しか会っていないわたしに対して、「また、仕事をぬきにして自宅に立ち寄れ」と勧めてくださっている。当時三十歳だったわたしに対し、四十歳年上の詩人の心遣いである。

壺井さんに署名をいただいた「壺井繁治詩集」には金子光晴さんの解説が載っていて、金子さんは冒頭で壺井さんの詩業をこう評している。

「ほぼ、半世紀近くにわたって、特に勤労大衆の詩の方向づけに壺井君の仕事が一つの目標になり、その役割がどんなに大きなものであったかということについて否定しようとする者は、誰もいないだろう」と。わたしは、九十歳を目前にしたいま、たいせつなことを見過ごしてきたかもしれない。もう一度、頂戴した「詩集」を繙いてみようかと思う。





著者略歴
植村鞆音（うえむらともね）　エッセイスト

小説家・直木三十五の甥、東洋史学者・植村清二の子として愛媛県松山市に生まれる。1962年早稲田大学第一文学部史学科卒業後、東映を経てテレビ東京に勤務。同局常務取締役、（株）テレビ東京制作代表取締役社長等を歴任。2006年『直木三十五伝』（https://www.rsl.waikei.jp/prize01.html）で尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞、2007年『歴史の教師植村清二』で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な著書に『夏の岬』『気骨の人 城山三郎』など。

壺井 繁治



詩人
1897-1975

1897年生まれ、香川県小豆島出身。早稲田大学英文科を中退後、1923年に岡本潤、萩原恭次郎らと詩誌『赤と黒』を創刊し、アナーキズム詩運動を展開。のちにプロレタリア文学運動へ転じ、全日本無産者芸術連盟（ナップ）に参加。『戦旗』の編集に携わった。治安維持法違反などで検挙・投獄されながら、社会への批評精神を詩に託した。戦後は新日本文学会の創立に参加し、1962年には『詩人会議』を創刊。民主的な詩運動の発展に尽力した。妻は『二十四の瞳』で知られる作家・壺井 栄。詩集に『風船』『頭の中の兵士』など。1975年、77歳で逝去。

株式会社プロスパーグラフ

PROSPER GRAPH

企画・デザインから制作・施工まで提案領域を拡大

1983年に設立されたプロスパーグラフは、ファッション・アパレル業界やスポーツブランドを中心に、店舗デザインをはじめ、装飾物や販促物の企画・制作、施工までを幅広く手掛けています。デザインを起点とした高い企画力と、長年にわたり培ってきた豊富な業界知見が同社の強みです。

市場環境や顧客ニーズが多様化するなか、お客様のブランド価値向上に貢献するためには、高品質な製品の提供だけでなく、企画やデザインまで踏み込んだ提案が求められています。この参画により、KPPグループが持つインクジェットメディア、プリンター、インクなどの販売力に、プロスパーグラフのクリエイティブ力と顧客接点から得られる知見を融合。資材の提供から企画・デザイン、制作・施工までを一貫して支援する体制を整え、提案力とソリューション開発力の向上を図ります。

DATA

会社名　：株式会社プロスパーグラフ
代表者　：代表取締役社長 渡辺 克礼
所在地　：東京都渋谷区神泉町9-1
事業内容：デザイン、店頭装飾物制作、施工等
HP　　：https://www.prosper-graph.com/

■デザイン・施工作品（一部抜粋）









編集後記

表紙を彩っているのは北海道・釧路川に架かる橋からの景色をモチーフに、現代美術家の大村雪乃さんが創られた「幣舞橋夕景」という作品です。写真では夕焼けが黄色やピンク色のグラデーションに、水面は濃いオレンジ色に見えますが、実物はこの部分がカッティングシートによって偏光になっていて、見る角度によってさまざまな色に光ります。この変化がきれいで見ていて楽しく、作品の周りをぐるぐる歩きながら、読者の皆さまとも実物ならではの面白さを分かち合いたいと思いました。当社公式ユーチューブや本誌のインスタグラムアカウントにて映像でも公開しますので、よかったらご覧ください。

大村さんの作品に登場する丸シールそのものは、一枚手に取ってもそれがアートだと思う人はおそらく多くないと思いますが、いくつも重なることによって夜景や自然などの情景を現します。付録のブックカバーとしおりではかなり大きく印刷しているので、無数の丸の集まりが新宿（表面）や大阪（裏面）の情景を浮かび上がらせている面白さや美しさが伝わったら嬉しいです。

インタビューでは、大層な道具や技術がないと絵が描けないという思い込みから人々を解き放ち、アートをより身近にする、そういった大村さんの想いや取り組みを伺いました。最初から特別なものだから価値があるのではなく、身近なものから始めたことが積み重ねの先で特別なものになると思うと、「まずやってみる」までの距離が少し近くなったように感じます。

（加藤智香）

ビジュアルコミュニケーション事業の拡大へ 専門性を備えた2社がKPPグループに参画

KPPグループは、事業ポートフォリオの転換を推進し、新たな事業領域の拡大に注力しています。その重要な戦略の一つとして、日本における「ビジュアルコミュニケーション事業」の本格的な展開をスタートさせました。

市場環境や顧客ニーズが絶え間なく変化するなか、お客様のブランド価値向上に貢献し続けるためには、質の高い製品やサービスの提供だけでなく、優れた企画力やデザイン力に基づく総合的な提案力が不可欠です。このたび、事業領域の拡大と基盤強化を加速させるため、国際紙パルプ商事は、同分野で確かな実績と強みを持つ「中外写真薬品株式会社」と「株式会社プロスパーグラフ」の2社を新たにグループへと迎え入れました。

KPPグループが培ってきた国内外の強固な事業基盤・ネットワークと、新たに加わった2社の専門性やクリエイティビティを融合させることで、これまでにない新たな顧客価値を創出していく方針です。ビジュアルコミュニケーション事業を新たな収益源として位置付け、グループの中長期的な企業価値向上を目指してまいります。



中外写真薬品株式会社

中外写真薬品株式会社

豊富な商材とグローバルな事業基盤を融合

1948年創業の中外写真薬品は、写真・映像文化の発展とともに歩み、アナログからデジタルへと変化する市場ニーズに応えながら、国内外で事業を展開してきました。現在は、インクジェットメディアをはじめ、プリンターなどのハードウェアやインクの販売、写真薬品の製造、フォトグッズの販売など、幅広い製品・サービスを提供しています。

さらに、150年近い歴史を持つ世界的な写真ブランド「ILFORD（イルフォード）」の商標権を有するイルフォードイメージングヨーロッパ社の株式50%を保有。日本を含むアジアや欧州で、同ブランドのファインアート紙や写真用フィルムなどを展開しています。

今回の株式取得により、中外写真薬品が持つ豊富な商品ラインアップや、KPPグループの顧客基盤やグローバルネットワークを融合。新たな顧客への提案機会を広げるとともに、高付加価値な製品・サービスの提供や、調達面におけるグローバルシナジーの創出につなげてまいります。

DATA

会社名　：中外写真薬品株式会社
代表者　：代表取締役社長 新藤 桂市
所在地　：東京都墨田区業平2-19-1
事業内容：写真薬品・工業薬品・医薬部外品その他関連製品、インクジェット用紙の製造販売
HP　　：https://www.chugai-photo.co.jp/



東京第一工場



いればんざい（左）、ILFOTAB（右）：通販番組でおなじみのケミカルのノウハウから生まれた製品群。



SILVERCHROME：アナログ写真向けソリューション



ILFORD GALERIE：ILFORDを代表するファインアートペーパー

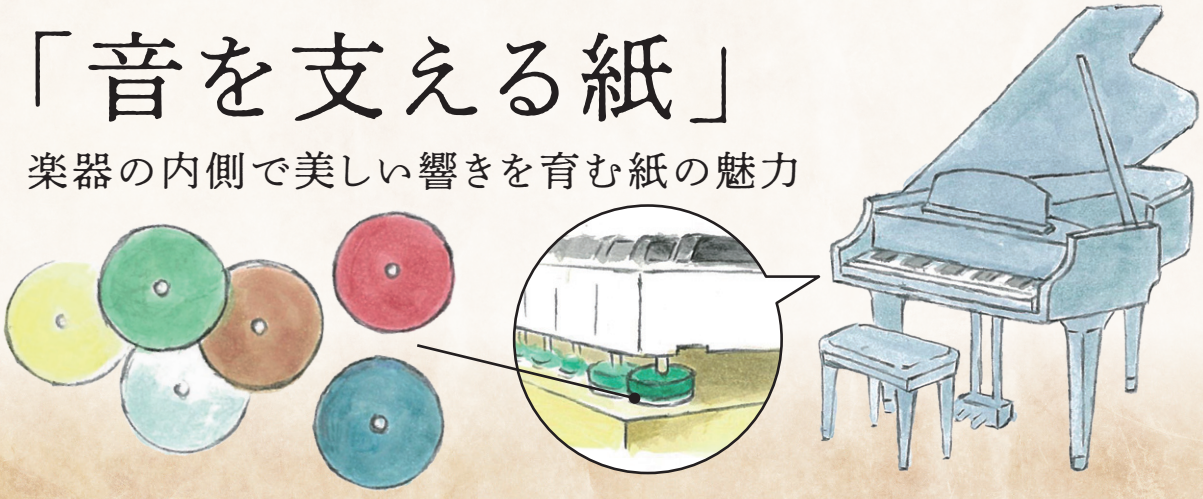
シート



ロール

「音を支える紙」

楽器の内側で美しい響きを育む紙の魅力



紙の綴
かみのつづり

Vol. 02

Title

音の響きを整える繊細な機能素材

コンサートホールで耳にするピアノの澄んだ調べや、通勤中の電車内でイヤフォンから流れる多様な音楽。私たちが美しい音色に心を震わせるその時、感動の源となる「音」を、実は「紙」が静かに支えていることをご存知でしょうか。

音楽と紙の関係といえば、まず思い浮かぶのは楽譜ではないでしょうか。紙は長い間、音楽を記録し、時代や国境を越えて伝える役割を担ってきました。しかし、紙の役割は「記録」にとどまりません。楽器の内部や調律・調整の現場に入り込み、目立たない場所で「音そのものを整える機能素材」としても不可欠な存在となっています。

その代表例がピアノです。ピアノの性能を引き出すには、音程を合わせる「調律」だけでなく、鍵盤やハンマーの動きを整える「整調」という極めて精密な作業が欠かせません。ここで活躍するのが、「紙パンチング」と呼ばれる中央に穴の開いたリング状の薄い紙部品です。鍵盤の下にあるピンに差し込み、0・05ミリから0・60ミリまでのさまざまな厚みの紙を1枚単位で差し引き、重ね合わせることで、鍵盤の高さや沈み込む深さを均一に微調整します。このミクロ単位の調整が、ピアニストの指先に伝わる繊細なタッチの違いを生み出し、豊かな感情表現を可能にしているのです。

また、楽器の内部でも、紙はさまざまな役割を担っています。パイプオルガンでは、自動演奏の指示を記録したロール紙や、内部の骨組みに紙が使われる例があります。アコーディオンでは、蛇腹の折り目を支える骨組みに厚紙が用いられています。さらに三味線でも、独特の響きである「さわり」の調整や、保管時の湿度調整に和紙が活用されています。

数ある素材の中から紙が選ばれる理由は、厚みを細かく調節できるうえ、必要な形に加工しやすいという柔軟性にあります。また、適度な弾力や圧縮性を備え、楽器本来の響きを妨げにくいことも大きな利点です。

テクノロジーが進歩した現代においても、最高の響きを生み出すノウハウは熟練した人の耳と指先に委ねられており、その感覚に応えるのは紙という素朴で精密な素材です。私たちの耳に届く豊かな響きの奥には、普段は目にすることのない紙の働きが息づいています。

RICE INK®
輸送マイレージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインキを使用しています。

Eco・Press Binder
針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。

無料購読のお申込み
毎号無料でお送りします!

公式インスタグラム
ID:kpp.tsunagu
ぜひフォローをお願いいたします!

KPPグループホールディングス株式会社
KPP GROUP HOLDINGS CO., LTD.
発行:グループコーポレート・コミュニケーション室
〒104-0044　東京都中央区明石町6番24号
TEL(03)3542-4166(代)
https://www.kpp-gr.com/

「TSUNAGU」Vol. 68 使用紙: OKトップコートマットN(127.9g/㎡／王子製紙株式会社)マット紙としての充分な紙厚とダル調の優れた印刷再現性とを兼ね備えたA2マットコート紙です。